

コミュニケーション・ストラテジーとしての「全体像」の考察

村松賢一

要旨

話し言葉によるコミュニケーション、中でも、情報伝達的な説明文脈においては、談話の初めに全体像を述べるのが、十全な意思伝達にとって有効である。全体像とは、後続談話の題目や結論、要旨、目的、構成、などを言語的に明示したものである。これらを談話の冒頭に配置することは、単に聞き手が理解しやすいばかりではない。話し手にとっても、談話を組織化しやすくなるなどの利点をもたらす。更に重要なのは、全体像を介して、聞き手が早い段階でコミュニケーション目的を共有し、積極的にコミュニケーション過程に関与できるようになることである。こうしたことは、第二言語学習者の場合、不十分な目標言語能力を補うコミュニケーション・ストラテジーとして、極めて大きな意味をもつ。日本語教育でも、論理的な話し言葉の習得が必要とされる中・上級段階において系統的に指導されることが望ましい。

キーワード

コミュニケーション・ストラテジー 全体像 話し言葉の線条性
スピーチの組織化 コミュニケーションの共同性

はじめに～なぜ、「全体像」に注目するのか～

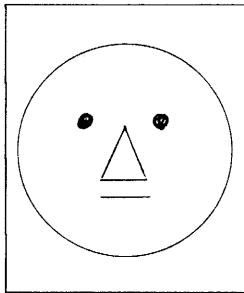
次の発話は、日本語学習者がある対象を描写したものである。この説明から何がイメージできるだろうか。

- (1) 一つのマルがあります。このマルの中には、三角が真ん中にあります。
で、三角の下に一つの短い棒がおいてあります。また、三角の上に、
二つの黒い点があって、この二つの黒い点には、分けられて、三角の間にあります。

実は、これは、図 1 (次頁) の説明なのである。口頭でこの説明を聞いた者は傍線部の表現につまずき、かなり違った図を書いた⁽¹⁾。

では、次のような説明ならどうだろう。別の学習者の例である。

- (2) この図をパッと見ると、【人の顔】のように見えます。ただ、カノ顔は、耳も髪の毛も眉毛もありません。まん丸の形しています。メエと鼻と口がちゃんとありますが、ただ、このメエは、普通のメエではありません。まん丸の真っ黒の瞳しかありません。鼻は三角で、三角のカナジで、口は、平らな線で表れてます。



この留学生の場合も、傍線部のような分かりにくい部分がないわけではないが、これを聞いた者はほぼ正確な図を再現した。それは、冒頭の「人の顔」という表現に助けられて、聞き手がその大枠の中で想像力を働かせ、不正確な発音やあいまいな語句を補正して聞くことができたからと思われる。

この「人の顔」に相当する表現を、本稿では「全体像」と呼び、【 】で示すことにする。

図. 1

次の例は、都内の同じ寮に住む留学生と日本人学生に、池袋からの道順を説明してもらった談話の冒頭部分である。

- (3) と、池袋から説明します。簡単に言えば、【電車で、5分ぐらいかかって、電車を降りて、歩いて5分ぐらいかかる。だから、全部で10分ぐらいかかる】。じゃ、詳しい説明に入ると、・・・(體牲)

- (4) 池袋駅の東武デパートの前にある東上線に乗って、大山駅で降りて、大山駅の南口を出ると、ハッピーロードという商店街があるので、その商店街を歩いて行くと、・・・(体牲)

どちらが聞きやすく理解しやすいかは言うまでもないと思う。(3)のように、全体像を冒頭に示して、情報処理の大枠をまず作ってやると、聞き手は、話を聞く準備ができるが、(4)のように、全体像が無く、いきなり部分の説明から入ると、話について行くのに大変神経を使う上、細部のちょっとした分かりにくさが、そのまま情報の伝達不全につながってしまうことは、日常よく経験するところである。

このように、「談話の冒頭に全体像を配置する談話構成」(以下、単に「全体像」とする)の習得を指導することは、母語話者にとっても意味のあることだが、特に、目標言語能力が十分でない第二言語学習者の場合、コミュニケー

ジョン・ストラテジー⁽²⁾として有効だと思われる。そこで本稿では、全体像のコミュニケーション論的本質を明らかにした上で、その表現上の機能や実際の用いられ方を整理して、日本語教育への導入の手がかりとしたい。

1. 話し言葉の特性と全体像

1-1 話し言葉のメディア特性

コミュニケーション・メディアとしての話し言葉の大きな特性は、その著しい線条性である。そもそも線条性は言語を言語たらしめる根本的な属性の一つだが、話し言葉は書き言葉と比べてより一層その性格が強い。特に、日本語は構文的に述部が文の最後に現れるため、線条性の制約を大きく受ける。

たとえば、次の例はその典型である。

(5) この列車は、白石蔵王、郡山、新白河、那須塩原、宇都宮、小山の各駅には停車致しませんので、ご注意ください。(東武轡轡ナカス)

これらの駅に停まるか停まらないかは、説明される順に最後まで緊張して聞かないと分からない。

もう一つ、話し言葉の大きな特徴に、「時間的制約」といわれるものがある。(Bygate, 1987:14)。これは、コミュニケーション過程の二つの局面に現れる。一つは、話し手の言語産出の過程、もう一つは聞き手の聴解過程である。

まず、話し手にとっての時間的制約とは、発話に際して、「推敲」の時間が与えられないことを意味する。脳内に発生した意図は同時に言語化されなければならない。この困難は、改まった場面でのスピーチや口頭発表のように、あいづちなどの、聞き手の協力が得にくく、談話が長くなるほど大きくなる。

一方、聞き手の聴解過程に発生する時間的制約は、話し手によるメッセージの送信と聞き手の受信が同時に行われねばならないことに起因する(畠, 1987:24)。簡単に言えば、聞き手は、常に部分的にしか送信されてこない言語記号を瞬時に解釈して意味を再生しなければならないのである。

以上の特性は、不可避的に行き違いや誤解を生み、コミュニケーション・メディアとしての話し言葉の大きな弱点になっている。それにもかかわらず、何とか用を足しているのは、コンテキストや既有知識、そして何よりも聞き手という補正装置があるおかげである。

このことは逆に言うと、コンテキストがフリー、話題についての予備知識が乏しい、聞き手とのやりとりが限られる、談話構成が複雑、という状況になれ

ばなるほど、何らかの工夫をしないと言語だけでは正確な意志疎通を図ることが困難なことを意味している。コミュニケーション・ストラテジーといわれるものが必要とされる所以である。全体像を冒頭に配し、全体から部分へと談話を構成する方法は、そうしたストラテジーの有力な柱である。

次に、具体的な用例の分析を通じて、ストラテジーとしての全体像の機能を詳しく検討してみよう。

1-2 全体像のコミュニケーション・ストラテジー機能

前述したように、話し言葉の線条性と時間的制約は、話し手、聞き手双方に緊張と負担を強いるものであった。その中で、全体像は、まず聞き手負担を軽減するのに役立つ。たとえば、(5)の例も、次のような全体像をつければ、随分理解しやすくなるのではないだろうか。

(5)′ 【この列車は、次の各駅には停車致しません】のでご注意ください。

白石蔵王，郡山，新白河，那須塩原，宇都宮，小山，これらの駅には
停車致しません。

こうした配慮により、日本語の構文上の制約も緩和され、聞き手は情報を処理する態勢を整えることができる。

次に、全体像を意識することは、話し手にとっても大きな利点がある。それは、全体像がスピーチを組織化する上で重要な働きをするからである。

たとえば、次のスピーチをみてみよう。

(6) おめでとうございます。えー、実は、私はこの近くに住んでいるものですから、この会場まで自転車で来ました。今日は、この前の〇〇君の結婚式に続いてレンチャンで（引き続いて、の意か。筆者注）、栄光の受付をやらせていただきました。受付というのは、いいもので、スリットの入ったチャイナドレスの美人の方なんか来ると、ドキッとしてしまして、なかなか、役得もあるんです。何を言いたいのか自分でもよく分からなくなりましたが、・・・(構賦の概論)

論旨があいまいで、いわゆるまとまりの無い話の典型だが、こんなとき、たとえば、次の例のように、全体像を意識するとスピーチを組織しやすくなるはずだ。

(7) 私は、【彼の知られざる一面】をお話したいと思います。彼は、非常に秀才ではありますが、実は【努力の人】なのです。

【 】内の全体像が、スピーチの枠組みを作っているため、(6)のように、脱線したり、結論を見失う危険性が少なくなるのである。

もう一つ、全体像を初めに提示することは、話し手に、「次に何を話すか計画し準備する時間を与え」心理的な余裕をもたらす(Shiffrin, 1980:210)。話の大枠が聞き手に了解されていると思えば、気持ちが落ち着くのである。逆に、初めから細部の説明から入ると、筋道を立て、結論にたどり着くことが容易でなく焦ってしまう⁽³⁾。その意味で、全体像は、話し手が話し言葉の時間的制約を克服するための方略ともなるのである。

以上に加えて重要なことは、全体像が、聞き手のコミュニケーション過程への積極的な関与、つまり、コミュニケーションの共同性を保障する点にある。このことは、冒頭でも簡単に触れたが、実際の用例に即してもう少し詳しく考察してみたい。

次の例は、電話でチケットを予約した客に対する係の対応の言葉である。

(8)では、予約番号を申し上げます。【全部で8ケタです】。よろしいですか。1 2 3 4 8 7 6 5, これがお客様の予約番号となっておりますので、・・・(チケットの受領の謝)

このように、【 】の全体像があれば、聞きやすくなるだけでなく、もし、1 2 3 4 7 6 5と聞き違った場合でも、聞き手は一桁少ないことに気づき、問い返すことが可能であろう。が、この全体像がないと、復唱という別のストラテジーを使わない限り、聞き手が自ら誤った情報を修正する可能性は少ない。

聞き手の補正機能が発揮されるのは、この例のようなインターアクション性の高い場面だけではない。授業や講演など、一方通行のコミュニケーション過程でも、たとえば、話し手の「大事なことが4点ある」という表現に助けられて、もし、談話マーカーを欠いて項目立てが明確でなくても、聞き手が主体的に4項目に再構成することが可能である。

以上のように、全体像のコミュニケーション・ストラテジー機能とは、メッセージの伝達性、談話の組織化、コミュニケーションの共同性という三者の総合と理解すべきである。

2. 全体像の種類

一口に全体像と言っても、その言及する対象は談話の性格や目的によって多種多様である。本節では、後続談話の内容や構成などに言及し、以上の三つの

機能を果たす言語表現という観点から用例を収集し、分類を試みる。尚、以下の区分及び名称はまだ暫定的なものである。

2-1 題目的全体像

(10) 今日は、お忙しいところ、敢えて集まっていたいただいたのは、【社内でのマナーについて、今一度見直して貰いたいこと】があったからなんです。実は、昨日、お客様から電話がありまして、・・・(職場のミーティングでのリーダーの話)

(10)の【 】や(8)の「予約番号」、(7)の「知られざる一面」などの表現は、これから何について話すのかを聞き手に知らせるわけで、いわば、談話の題目を示す機能を担っている。全体像としては最も基本的なものであろう。格助詞の「は」や「～について」、「～のこと」、或いは、「初めに」、「次に」、「二つ目は」などの談話マーカーを伴うことが多い。

2-2 結論的全体像

(11) 今回、調停を申し立てた【遺族の基本的な要求というのは、金銭要求ではありません】。遺族としては、こうした、役員や従業員の過労死が多発するという異常な事態を是非防止をしてもらいたい、というのが基本的な願いです。(弁護士の前での発言)

(12) 司会者：どうしましたか。

相談者：えーと、【夫の女性関係でモメて、夫が家を出て行ってしまったんですよ】(電話の悩み相談)

(7)の「努力の人」という表現もそうだが、これらは、談話内容の結論を表現していると考えられる。口頭発表などで、あらかじめ要点を提示してから本論に入るのもこのケースにあたろう。結論的全体像の場合は、「基本的には」とか「一言で言うと」、「要するに」、「つまり」、「簡単にいうと」、「結論から言うと」などの表現を伴うことが多い。

2-3 構造的全体像

(13) 【脳卒中というのは、大きく分けて、脳梗塞、脳出血、くも膜下出血の三つがあります。では、それぞれについて詳しくご説明しましょう】。(テレビの健康番組での医師の話)

この場合は、談話がどのように構成されているかをあらかじめ説明している。或いは、これから、どのような組み立てで話すかを予告している。このように、談話構造が初めに明示されると、聞き手は展開を予測したり、途中で、話がどこに来ているか、現在地を確認しながら聞くことができるであろう。

2-4 俯瞰的全体像

(14) では、コースをご説明いたしましょう。【日本一大きい琵琶湖の丁度南半分を利用する】と覚えておいてください。(マラソン中のアナウンス)

(15) 私の事務所は、新宿から電車ですらっしゃると、【進行方向、右側。駅から5分ほどのところ】にあります。改札口は一か所です。まず、改札を出ましたら、・・・(電話での道案内)

こうした空間的 (spatial) な説明の場合は、細部に入る前に、対象を俯瞰的にとらえた、文字通りの全体像が有効である。

2-5 定義的全体像

専門的、あるいは聞き手が理解しにくい事柄を説明する場合は、簡単な言葉で定義することがよく行われる。

(16) 夫婦別姓とは、やさしく言うと、【結婚しても名前を変えなくてもいいですよという制度】です。(子どもニュースのキキスターの説明)

この場合は、「いわば」とか「簡単にいうと」、「単純化すると」、「大雑把に言えば」などの表現や「～のような」という比喩と合わせて用いられることが普通である。

2-6 評価的全体像

(17) いよいよ、【優勝を決める一番】を迎えました。(相撲中継のアナウンス)

(18) これまでは、問題を整理しただけで、いわば常識論だったと思いますが、これから申し上げることは、【今まで誰も気がつかなかったことで、私のオリジナル】です。(経済講演会の講師の話)

話し手は【 】の表現で、自らの談話の意義づけを行っている。このような、聞き手がどのような視点で情報を受け止めたらよいか、その価値評価に言及する全体像も、聞き手が情報処理の枠組みを作るのに役立つ。

さて、この他にも、

(19) これは【質問ではありません。ご発表に対する感想】というふうにお聞きください。(学会でのフロアーからの発言)

といった、メタコミュニケーション的全体像とでもいうべき表現もあるようだ。まだあるかもしれない。いずれにしろ、こうした多様な全体像を一覧してみると、あらためて、全体像が、よりの確なコミュニケーションを意図したストラテジックな言語表現であることが納得される。

次に、こうした全体像が実際の談話においてどのように用いられのを見てみたい。全体像を意識的に運用していると思われる、話すことが専門の人々の発話から例を引く。

3. 全体像の実際の運用

3-1 併用型

上にあげたさまざまな全体像は単独で使われる場合も勿論あるが、次のように、いくつかの種類が併用されることも珍しくない。

(20) ではこれから、日常、皆さんが【簡単に実践できる省資源の試み】をお話ししたいと思います。一言で言うと、【物を大事にしていきたい】ということに尽きます。以下、そのことを具体的に【三点にわけてお話しします。一つは、物を買うとき、二番目は、使う時、そして最後に、物を捨てる時、どんな点に注意したらいいか】ということです。

【この順に説明してまいります】。(消費者セミナーでの消費生活コンサルタントの話)

この例では、【簡単に実践できる省資源の試み】(題目的全体像)、【一言で言うと、物を大事にしていきたい】(結論的全体像)、【三点に分けてお話しします。一つは、…。二番目は、…。そして最後に、…。】(構造的全体像)という風に、何種類かの全体像を組み合わせている。

3-2 階層型

また、全体像を一言で済ませずに、抽象度によって階層化されたいくつかの表現を重ねながら、徐々に対象に迫る方法もよくとられる。

(21) アナウンサー：大統領と議会の対立は何が原因ですか。

解説者：【赤字の削減ですね】。その中で、【福祉予算を削るかどうかで対立している】。7年間で削減することには合意したんですが、【その方法をめぐって対立している】んです。クリントン大統領とし

ては、・・・(テレビのニュース織)

「赤字の削減」→「福祉予算を削る」→「具体的な削減方法」という風に、抽象度を下げながら、全体で全体像を形成している。このような階層的運用は、聞き手の理解度や時間的制約に配慮した戦略といえ、聞き手にとって複雑な問題や、馴染みの無い事柄を説明する際などに使われる。

3-3 複合型

全体像は談話の冒頭にのみ置かれるとは限らない。話し言葉の線条性を考えれば、そう短くはない、あるまつまり毎に全体像がついていた方が、聞き手は話の見通しを立てながら聞くことができるであろう。次の例のように、具体的には、項目やパラグラフの前につけられることが多い。

次は、茶の湯の宗匠によるお茶菓子の説明である。

(27) 【お茶席で使われるお菓子について】ご説明しますと、まず【種類】は、【大きく二つに分かれまして、主菓子と干菓子がございます】。

まず、【主菓子ですが】、世間でいう生菓子です。これは、【日持ちがいたしません】。水気を含んでおりまして、せいぜい丸一日、その日のうちに召し上がれというお菓子です。

もう一つの【干菓子ですが】、【これは乾いています】。多少長持ちをいたします。普通、このように、細工をして、色とりどりに盛り合わせます。

そして、【それぞれの役割】がございます。

【主菓子】は、西洋料理でいえば、【デザート】です。正式の茶会の茶事の場合ですと、懐石を召し上がったすぐ後に出ます。そして、しばらく休憩されてから、濃い茶を召し上がる。ですから、濃い茶の前に召し上がるものでございます。

【干菓子】のほうは、【最後のお口直し】といったらいいでしょうか。

濃い茶の前に薄茶を召し上がりますが、薄茶の前に出されるものでございます。(テレビの茶の湯の番組)

この場合、【茶席でのお菓子】が談話全体の題目を示している。次に、【種類は】が第一パラグラフの題目を示し、【大きくわけて主菓子と干菓子の二種類】が構造を示す。以下、【主菓子ですが】(子パラグラフ①の題目)、【日持ちがしない】(その結論)、【干菓子ですが】(子パラグラフ②の題目)、

【長持ちする】（結論）となっている。

次に、【それぞれの役割】で、第二パラグラフの題目を示し、以下同じパターンで、【主菓子】（子パラグラフ①の題目）、【デザート】（結論）、【干菓子】（子パラグラフ②の題目）、【最後の口直し】（結論）となる。

このように、途中でパラグラフが変わるごとに、何の話か（題目的全体像）、要するに何なのか（結論的全体像）、を明らかにして貰えると、聞き手の負担は随分軽減される筈だ。

4. 日本語教育への導入と課題

以上、コミュニケーション・ストラテジーとしての全体像表現の有効性を、理論的に立証し、その多様な機能、実際の運用を概観した。このような全体像表現に習熟することは、論理的自己表現の機会が多くなる、中・上級段階の日本語学習者にとって、極めて有益なことと思われる⁽⁴⁾。実際、村松（1996）は、全体像を中心にした話し方指導を行い、一定の成果を上げたことを報告している。

しかし、本格的に教育へ導入するためには、まだ解決すべき課題が多い。

一つは、客観的な効果測定である。本稿では、理論的にその有効性を検討したが、全体像は本当に情報伝達を分かりやすくするのか。聞き手の補正機能を引き出す働きがあるのか。用例を更に収集し、実験的な調査で裏づけなければならないだろう。

次に、全体像の使用条件を明らかにすることが必要である。まず、どんな目的のスピーチにおいて有効か。本稿では、情報伝達を目的にした説明文脈に限って考察したが、他の、たとえば、説得的文脈やストーリーテリング的文脈ではどうなのか。それらにおいては、初めに全体像を述べることは、必ずしも必要でないばかりか、却ってコミュニケーションを阻害する場合があるかもしれない。また、量的に、どの程度の長さの談話につけるのが最も有効か。更に、聞き手との関係に関しても、一対一の会話と一方通行型の独話では、全体像の運用や語形態が異なることが予想される。コンテキストとの関係も重要である。どの程度コンテキストを共有していれば全体像を省略してもよいのか。

こうした点を、実証的に明らかにすることが今後の課題だと思われる。

注

- (1) これは、筆者が、中・上級日本語学習者を対象に行った日本語授業でのある学習者の発話である。ペアを組ませ、一方が他方に図. 1を説明し、同じ図を書かせるゲームである。
- (2) 第二言語習得論では、コミュニケーション・ストラテジーという語は、学習者が、既有的の言語能力や知識を用いて問題を解決する方策という限定的な意味で使われることが一般的である。ここでは、もう少し広い意味、つまり、「話し手と聞き手が、言語的あるいは社会言語学的に意味を共有していないと思われる状況で、双方が共通理解を得る為にする様々な試み」(E. Tarone, 1983:65)であり、限られた能力・知識を最大限に生かして、最大限のコミュニケーション効果をあげる為の言語的方策と理解する。
- (3) 私事だが、ある英語話者から、日本人は床に直接寝るのかと聞かれ、うまく答えられなかったことがある。この時、まず、「いやちがう。【二種類のマットを敷いて寝る】のだ」という全体像さえ言っておけば、気持ちが落ち着き、その後、一つは藁でできていて、常時床の上に敷いてある。その上に、綿でできたマットレスのようなものを敷くのだ、などと談話を組織化できたはずだ。
- (4) 最近、留学生談話の分析を通じて、日本語教育において、「メタ言語」(古別府, 1994)や、「ディスコース・マーカー」(仁科ら, 1994)の運用を指導する必要があるとの指摘が相次いでいる。いずれも、用語こそ違え、機能的には本稿で扱った全体像と重なる部分が多い。

参考文献

- (1) Tarone E. (1983) "Some thoughts on the notion of 'communication strategy'" Faerch, C. & Kasper, G. eds. *Strategies in Interlanguage Communication*. Longman.
- (2) 村松賢一(1996)「中・上級学習者のスピーチ指導の一視点」『平成8年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会
- (3) Bygate M. (1987) "Speaking" Oxford University Press.
- (4) 畠弘巳(1987)「話しことばの特徴」『国文学 解釈と鑑賞』第52巻7号 至文堂
- (5) Schiffrin, D. (1980) "Meta-TALK: Organizational and Evaluative Brackets in Discourse" Special edition of *Sociological Inquiry* 50:199-236
- (6) 西條美紀(1995)「討論場面におけるメタ言語の機能」(お茶の水女子大学修士論文)
- (7) Stubbs, M. (1983) "Discourse Analysis" The University of Chicago Press
- (8) 古別府ひづる(1994)「専門的内容における口頭発表のメタ言語表現」『表現研究』54号 表現学会
- (9) 仁科喜久子・笹川洋子・土井みつる・五味政信・楠本はるみ(1994)「理工系留学生のセミナーでの対話理解過程の分析」『日本語教育』84号 日本語教育学会

(お茶の水女子大学)